# ハプスブルク帝国下におけるシチリア，ナポリの金融構造 (1550—1648)

中　島　健　二

## I　問題の所在
——重商主義と重金主義——

16世紀後半から17世紀前半にかけての地中海は，強大なハプスブルク帝国，勃興する北西欧諸国の商船隊，本拠地での地歩を守ろうとするイタリア商人，そして東方からキリスト教世界を脅やかしながらも大きな市場として期待されたトルコ帝国が激しくせめぎあう一大舞台であった。

ところで，川北稔氏は，この時代の地中海がやがて訪れるイギリス「商業革命」の「予行演習場」としての意味を持っていたことの意義を強調する。イギリス「商業革命」とは，①貿易量の飛躍的増大，②貿易相手地域の激変，③商品構成の根本的変化，の3点に要約される[1]。地中海市場がその「予行演習場」とされたのは，次のような経緯による。すなわち，イギリス商人は16世紀後半からの毛織物生産とその輸出の長期的な不振，加えて1620年代の深刻な輸出不況を打開する突破口として，不安定な毛織物輸出とともに，東方物産，新世界物産の輸入（そしてその再輸出）に大きな比重を置いた地中海貿易へとなだれこんでいったのである[2]。

「商業革命」の予行演習からその本格的な展開へといたるイギリス貿易の変転過程は，この国の重商主義者の議論をすぐれてアクチュアルな性格のものにした[3]。

1) 川北稔『工業化の歴史的前提』岩波書店，1983年，132ページ。
2) 同上，28-32，65-70，72-78ページ。
3) 川北氏は，イギリス「商業革命」の実態とその背景をなしたものこそ「重商主義植民地帝国」であったとして，その構造分析へと論を進めていく。同上，第5章以下参照。

重商主義者を貿易差額論者と断じ，貴金属を富の表象とみなす硬直的な志向のみを彼らから読取ろうとする重商主義批判に対して，本山美彦氏はトーマス・マンのテキストに立ち返りつつ，次のようなマンの再解釈を試みている。すなわち，マンは，①貨幣のみを国内に集積することの無意味さを説き，外国貿易をも手段とする製造業の隆盛に富の根源をみた。②外国貿易には金属貨幣が必要であるが，国内ではそれが信用貨幣で代替できるということを認識していた。③貿易の黒字は，したがって自国商品の競争力の結果的な指標ではあっても，それ自体にはかならずしも積極的な意味があるわけではないということを理解していた[4]。

マンは実際のところ，彼が活躍した17世紀初めの国内の貨幣不足と外国為替市場の混乱という情況のなかで，それでもなお一時的な正貨流出をともなう外国貿易の続行なしには富を蓄積しようのない自国経済の厳しいジレンマを鋭く認識していたのである。そして，そのような外国貿易こそが，「商業革命」の「予行演習場」とされた地中海，さらには東インドからの輸入貿易であった。もちろん，それは再輸出による最終的な黒字の成算があってのことである。さらに，この貿易には，花形輸出商品の期待をかけられた新毛織物の販路拡大の努力がともなっており，実際にそれはとりわけイベリアで大きな成果をおさめつつあった。

本稿は国際金融史における「重金主義」と「重商主義」の区別の確認から出発する。「重商主義」とは，国内では生産と信用機構の拡充に努めながら，他方，外国貿易では自国商品の売込みと輸入品の再輸出に力を入れつつも，それによって得た外貨は可能なかぎり対外決済に回そうとする志向をいう。それに対して，「重金主義」とは，貿易差額説も含めて国内における貴金属の多寡そのものに国富の象徴をみる考え方である，と定義することができるだろう。

ところで，イギリス貿易の命運が賭けられた地中海地域に目を転じてみるとどうであろうか。上述の区別からすれば，ウォーラースティンがハプスブルク

4) 本山美彦『貨幣と世界システム　周辺部の貨幣史』三嶺書房，1986年，125-136ページ。

帝国を「スペイン・ナショナリズムの視点に立って重商主義政策を採用するといった方向を拒んだ」国としてとらえたことが容易に理解できよう[5]。皇帝カルロスV世やフェリペII世が，新大陸から収奪した莫大な金銀を貿易や領土内の生産的な投資ではなく，ヨーロッパ諸国やイスラム勢力とのたび重なる戦争に消尽したこと，しかもこの貴金属の到来を見越して外国の金融家から多額の資金を借入れたあげくに，その累積債務のために16世紀後半から何度も財政破綻に陥ったことについては，ここで多言しない。

「中核諸国はハプスブルク，ヴァロア両帝国がそれぞれ経済的に破綻したことを，またとない財政上の教訓としていた」と，ウォーラースティンは言う[6]。しかし，スペインの金融政策を教訓とした国は地中海地域にも少なくともひとつだけあった。ヴェネツィアである。1595年，ヴェネツィアのスペイン大使は，豊富な金銀を思うがままに費やしながら国力を疲弊させていくスペインの現状を本国に報告している[7]。良貨不足にあえいでいたヴェネツィアが，まず政府の穀物買付代金を手始めに，不安定ながらも徐々に国家信用を国内金融構造の基礎（銀行貨幣）として押し出していくようになったのは，この報告の2年後のことである[8]。

金属貨幣を東方へ向けての輸出「商品」としてむしろ積極的に位置付けようとした点において，この国の政策はトーマス・マンの主張と軌を一にしていると言うことができる。

次節から検討に入るシチリア・ナポリの金融構造も，ヴェネツィアと同じ道をたどる可能性を十分にはらんでいた。しかし，南部イタリアは，16世紀中葉をピークにしだいに凋落の色を濃くするハプスブルク帝国の領土のなかで，逆

5) Wallerstein, I., *The Modern World-System*, 1974, 川北稔訳『近代世界システムII』岩波書店，1981年，26ページ。
6) 同上，邦訳，29-30ページ。
7) Magatti, E., "Il mercato monetario veneziano alla fine del secolo xvi," *Nuovo Archivio Veneto, new ser.*, Vol. 27, 1914, p. 320.
8) 拙稿「ヨーロッパ『世界経済』形成期におけるヴェネツィア預金銀行の発展」『経済論叢』第140巻第5・6号，1987年，参照。

にその支配がもっとも厳しさを増していった地域でもあった。

## II　シチリア，ナポリにおける「預金銀行の展開過程」と外国商人

中世以来，預金銀行の活動が活発に繰り広げられてきた地中海諸地域のなかでも，シチリア，ナポリは際立った特徴をもっていた。

たとえば，15世紀のシチリアでは，その信用手段がたんなる預金振替から自己勘定宛の為替手形振出へと独特の経路をたどって発展した。また，この為替手形は約束手形としても実質的に利用されており，その点において，16世紀のアントワープ金融市場に先駆するものであった。しかも，シチリアのこうした手形は裏書によってある程度の譲渡性をもっていたのである[9]。

また，シチリア，ナポリともに16世紀前半までに信用状（lettere di credito, fedi di credito）が著しい発展をとげたことがよく知られている。それらは銀行の預金受領証，預金証明書として小切手に似た機能（それは両地域で若干異なっていた）をもち，南部イタリアの広い範囲で利用されていた[10]。

銀行家の構成をみると，外国のマーチャント・バンカーがシチリア，ナポリの貿易や為替のみならず，これら地域の〈内部〉取引でもある預金とその振替に広く従事していたことがわかる。15世紀から16世紀初めにかけては，トスカナ地方のピサ，ルッカ，フィレンツェのマーチャント・バンカー，そしてユダヤ系の金融家が南部イタリアに進出し，この地域の金融の主導権を握っていた[11]。

地中海貿易の絶好の中継地という地理的要因が彼らを魅きつけたことは言うまでもないが，それに加えて，両地域とくにシチリアがブローデルをして「地中海のアルゼンチン」と言わしめたほどの大穀倉地帯であったことは重要であ

9) Trasselli, C., "Promesse e lettere di cambio nel'400 siciliano," in: *Studi in Onore di Amintore Fanfani, Vol. III*, 1962, pp. 528-531.
10) *ibid.*, pp. 532-534.
11) Giuffrida, R., "Finanza pubblica e credito," in: *Storia della Sicilia, Vol. VII*, 1978, p. 93.

る。西欧が貴金属不足に陥っていた15世紀前半，南部イタリアの小麦は，この時期に生産のピークを迎える東欧のボスニア，セルビア地方の銀を輸入するための貴重な対価商品となったし[12]，またそれ以前から，シチリア，北アフリカ間には，穀物と金の交易が盛んに続いていたことが知られている。

しかし，それにしても，シチリア，ナポリ系の金融業者が外国人に比べて少なかったのはなぜであろうか。16世紀初めのシチリアには，わずかにトラパーニ市に地元の銀行が存在するのみであった。いずれにしろ，外国のマーチャント・バンカーは，16世紀後半に始まる「預金銀行の展開過程」に決定的な影響を及ぼすことになるのである。

「預金銀行の展開過程」とは，16世紀末以降，西欧の多くの地域で見られた民間預金銀行の倒産と消滅，そして公立銀行の設立へといたる一進の現象のことを言う。国際金融史におけるその意義については別稿で論じた[13]。

シチリア，ナポリにおいても，この時期，外国系の民間銀行は激しい動揺をみせるのである。

その原因はおもに市場に出回る良貨の不足傾向に帰することができる。貨幣市場の逼迫が預金銀行を苦境に追込むメカニズムは，一般的に言うと次のとおりである。すなわち，良貨不足が市場で流通する実在貨幣の単位貴金属重量あたりの計算単位を引上げる，逆に言えば，計算貨幣の相対的評価を落とす。そうすると，銀行貨幣のプレミアムを引上げないかぎり，預金選好はその分だけ低下する。しかし，このプレミアムの調整は困難であり，そもそも全般的貨幣不足が預金を為替や貿易に投機的に運用する銀行家の信用を低下させるのである。そして，まさにこのメカニズムがシチリア，ナポリに作用したのである。シチリアのオンス（onze：計算貨幣のひとつ）は1546年から1572-73年の間に8割近くも減価した。ナポリの場合は，カルリーノ（carlino：同じく計算貨幣）が1530年代から50年代にかけて約20パーセント，80年代には約10パーセント，

12) Spremič. M., "Il regno di Napoli aragonese e l'argento balcanico," *Archivio Storico per le Provinciale Napoletane, N. S.*, Ann. 13, 1974.

13) 前掲拙稿参照。

それぞれ減価している[14]。

では，何が貨幣不足を招いたのか。まず第一に，この両地域がオスマン・トルコとの軍事抗争でスペイン側の最前線に立たされたことが挙げられる。シチリアでは，それによって北アフリカへの穀物輸出の確実さが奪われたばかりか，1550年代末からしだいに優勢となったイスラム軍の襲撃に対する防衛強化のために，課税と対外支出が増加の一途をたどり，それが貨幣市場逼迫の大きな原因となったのである。1590年代には，政府歳入の約⅓が防衛費，また別に⅙が緊急用の出費にあてられた[15]。レパントの海戦前後の3年間（1571-73）には，スペイン艦隊司令官がこの島から120万スクーディを持ち去ったという[16]。

ナポリの場合，1579年のラヴァスキエーリ銀行の倒産がオスマン・トルコの影響をより直接に示している。1552年，トルコ艦隊がナポリ港を包囲する作戦に出たとき，ナポリ副王はこの銀行から急きょ20万ドゥカートの金貨を引出し，それを封鎖解除の代償としてトルコ軍提督に贈ったのである。この銀行は，その後，この時の引出し額に満たない新貨でしか返済されなかったこともあって，打撃から立直ることができないまま，倒産に追込まれた[17]。

スペインがこれら地域に大きな負担を押しつけたのは，トルコ軍に対する防衛費に限られていたのではなかった。というのは，この時期以降，とりわけ17世紀に入ると，かなりの正貨がヨーロッパ大陸における戦費，行政費として，これら地域からジェノヴァやミラノへ送られていったからである。ある試算によれば，1504年から1664年までの160年間に，8,000万ドゥカートがスペイン政府によってナポリから引出されたという[18]。

その仕組みについては後に述べることとして，ここでは次の点を確認してお

14) Braudel, F., *La Méditerranée et le Monde Méditerranéen à l'Epoque de Philippe II, 2éd., Vol. II*, 1966, pp. 479-480.

15) Smith, D. M., *A History of Sicily: Medieval Sicily 800-1713*, 1968, p. 173.

16) Koenigsberger, *H. G., The Habsburgs and Europe 1516-1660*, 1971, p. 98.

17) Lacombe, R., "Les pieuses banques de Naples," *Revue d'Histoire Economique et Sociale*, No. 3, 1966, p. 340.

18) Lacombe, R., "Avan toute banque ... L'or, ou la vertu?," *Revue Internationale d'Histoire de la Banque*, Vol. 1, 1968, p. 224.

く。すなわち，こうした原因によってもたらされた貨幣市場の逼迫は，マーチャント・バンカーの預金取引にこそ重大な障害となったのだが，彼らの対外的な為替や貿易の活動にとってはそれほど深刻な問題とはならなかったのである。たしかに，シチリアの穀物貿易は1550年代から漸減傾向にあり，何度か凶作と輸出危機に見舞われている。しかし，危機のときこそ穀物の輸出入をめぐる投機が活発化したのであり，また，穀物に代って生糸が着実に輸出を伸ばし始めていた。この島でもっとも繁栄した港湾都市メッシーナから輸出されるシチリア，カラブリアの生糸は，外国商人の独占的商品であった。彼らはすでに生産段階から，掛買（先払）によって農村の生産者を金融的に従属させていたのである。一方，ナポリの貿易収支は概ね良好であったという。それに何といっても，新大陸出自のスペイン銀貨が地中海に押寄せてくるのが，まさに1570年以後のことだったのである。マーチャント・バンカーは依然として南部イタリア経済のこうした〈対外〉的側面に十分な活動の拠点を残していたのである。

さて，シチリアでは，すでに1550年には，貨幣打造所（Zecca）に持込まれる地金に対して12パーセントのプレミアムが提供されなければならなかったほどの良貨不足であった[19]。さらに，1574年には市場の貸付利率が14～16パーセントを下回ることがなくなってしまうのである[20]。そうしたなかで，シチリアの首都パレルモに進出していたトスカナ系の有力な銀行家やリナルド・ストロッツィのような小麦大商人は，50年代から60年代にかけて次々と倒産し[21]，後にみるように，この島における金融の主導権をジェノヴァの金融家に奪われていくのである。

ナポリの場合，銀行の危機はシチリアに比べて遅く始まった。先にみたラヴァスキエーリ銀行（79年）に続き，1583年にはビッフォーリ，デ・ポンテ・コルヴォ，そして88年にはバンコ・デッレ・インクラビーレ，デル・ソレロ，コ

19) Smith, D. M., *op. cit.*, p. 174.
20) Braudel. F., *op. cit.*, p. 484.
21) Trasselli, C., "Mercati forestieri in Sicilia nell'età moderna," in: *Storia della Sicilia, Vol. VII, op. cit.*, p. 169.

ンポスティと，外国系の銀行が相次いで倒産した。1587年，ナポリ総務庁(Camera della Sommaria)は，マーチャント・バンカーの行動を告発する次のような請願書を副王に上申している。

「銀行がナポリにもたらした弊害を，陛下が匡正されますことを謹んで御願い申し上げます。と申しますのも，商人連中が冬期には税請負権(entrate)を買取るため，そして夏期には生糸，穀物，その他の商品を手に入れようとして，一般の人々が銀行に預け入れた貨幣を利用しますために，銀行が(準備)正貨不足に陥り，自らの用立てのために貨幣を引出そうとおもっている預金者に支払うことが困難となっているのです……。(支払のために)銀行は彼ら自身の手段で，あるいは仲介者を通して，貨幣を為替によって取集めることを余儀なくされており，それは高利子によってしか得ることができないありさまです」[22]。

公立の預金銀行が登場するのはこのような情況のなかからであった。まずシチリアからみると，1553年にパレルモ銀行，87年にメッシーナ銀行がスペイン国王の認可のもとに設立され，その業務を開始した。なお，トラパーニには，比較的規模の小さい地方銀行(Banco di Prefetia)が1523年以前から活動を続けている。預金者リストの当局への提出が義務づけられた(1564年)ことや，その業務においても，貸付が禁止されたこと，また勘定振替に公証人の立会を必要としたことなどから，いずれの銀行とも各市当局の後見のもとで厳しく管理運営されていたことがわかる。

このうち，首都に設立されたパレルモ銀行はカタロニアのバルセロナ公立銀行(1401年設立)をモデルにしたといわれ[23]，他銀行からの預金準備の集中やそれらへの貸付業務を期待されていた。しかし，この銀行が実際に担った役割はシチリア政府の「国庫」(tesoreria)以上のものではなかった。つまり，パレルモ銀行は，一般市民の小口の預金振替のほかは，おもに国王へ毎年上納され

22) Silvestri, A., "Sui banchieri pubblici napoletani da Filippo II al trono alla costituzione del monopolio," *Bolletino dell'Archirio Storico del Banco di Napoli*, No. 3, 1951.

23) Trasselli, C., "Per la storia del Monte di Pietà di Palermo," *Economia e Storia*, Vol. 6, 1959, p. 148.

る議会税（donativi）の出納，国王が要求する議会税の前借に対処するために応募された公債（soggiogazioni）の元利返済などにその利用が限られ，商業取引のほうはもっぱら伝統的な為替手形が利用され続けたのである[24]。

しかも，国庫としての機能においてさえ，パレルモ銀行が外国人金融家に対して優位に立っていたとは言いがたい。たとえば，1570年にパレルモで活躍したジェノヴァ人銀行家ジェンティーレは，“depositeria“ として国庫勘定の取扱や国王の緊急出費の立替に従事するかたわら，こうして手許に集めた原資を一担自らの個人勘定に貸すという形式を踏まえたうえで，こんどは“banchiere”としてそれを投資活動に回していた。このことを論証したトラッセッリによれば，第三者（政府も含めて）に対するジェンティーレの債権がパレルモ銀行宛の小切手（polisa）で支払われた例がいくつか見られるとはいえ，くだんのジェノヴァア人がパレルモ銀行に多額の預金をかかえていたとは確信できないという。民間人の depositerie 制度が正式に法制化されたものかどうかは不明であるが，1569年に王国資産院（Consiglio Patrimoniale）によって急きょ取決められたことがわかっている[25]。

ジェンティーレに続いて，不安定な経営ながらも，プロモントーリオなど数人のジェノヴァ人銀行家が国庫に関与するとともに，国内外の為替，預金取引の中枢として活動したことは，パレルモ銀行の地盤の弱さを浮彫りにしている。

とはいえ，これも「預金銀行の展開過程」の一局面，すなわち民間預金銀行が消滅する局面には違いなかった。事実，国内の貨幣不足はいかんともしがたく，預金にたずさわるジェノヴァ人も，ガストデンゴ銀行を最後に，1590年代にはやはりシチリアから撤退してしまうのである[26]。要するに，先に強調しておいたように，国内の貨幣市場が良貨不足をきたし始めて以後は，預金銀行が官民ともに振るわなかったのとは対照的に，貿易と為替取引とを基盤として豊

24) Giuffrida, R., *op. cit.*, pp. 93–94.
25) Trasselli, C., “Un banco genovese a Palermo nel 1570,” *Revue Internationale d'Histoire de la Banque*, Vol. 3, 1970, pp. 177–179, 189–91.
26) Trasselli, C., “Mercanti forestieri…,” *op. cit.*, p. 170.

富な資金を動かすことができた外国人マーチャント・バンカーの勢力は少なくとも政府金融の分野においては衰えることがなかったのである。

国王への資金供給機関としての役割についてさらに言えば，パレルモ銀行は17世紀に入ってもまったくの受身に立たされたままであった。たとえば，1607年，スペイン宮廷は流通通貨の貶化を是正するために早急に銀を回すようにシチリアから要請を受けた。しかし，このとき副王が取った措置は，同じく資金を必要としていたスペイン本国へシチリアから逆に地銀を供給することであり，シチリアにおける貶貨の新貨切換の費用を全面的にパレルモ銀行に負わせることであった[27]。そのために数年間の破産状態を強いられたこの銀行は，1630年代にも，準備通貨不足のため，正貨返済を中心とする危機に直面している[28]。政府としては，打続く戦争の費用を捻出するのがせいいっぱいで，銀行貨幣の信用を安定させるための何らかの機軸を実行に移すような余裕さえなかったのである。

一方，ナポリでは，1539年から1640年にかけて8行の公立銀行が設立された。そのうちの7行までは18世紀末まで活動を続けることになる。ナポリ公立銀行のもっとも大きな特徴は，それらが民間の篤志家，聖職者組織 (Opera Pie)，慈善病院などの出資による小口消費者金融として発足したことである。ナポリ副王がナポリ慈善銀行 (Monte di Pietà di Napoli) を公的機関として正式に承認し，そこに勘定を開設したのは1584年のことであった。民間銀行倒産のさなかのことである。

しかし，シチリアと同様に，財政窮迫にあえぐ政府がその資金調達を公立銀行にだけ依存することは不可能だった。〈世俗人〉による銀行活動の独占を認可しようとした副王の企ては，1598年を最後に果たせないままに終わるが，こうした企てはナポリ政府のジレンマをものがたっているようにおもわれる[29]。

27) Smith, D. M., *op. cit.*, pp. 199–200.
28) Aymard. M., "I genovesi e la Sicilia durante la Guerra del Trent'anni. II. Bilancio d'una lunga crisi finanziaria," *Rivista Storica Italiana*, Vol. 84, 1972, p. 997.
29) Lacombe, R., "Les pieuses banques de Naples," *op. cit.*, pp. 344–345.

1590年代初めにこの国を襲った深刻な経済危機がこのジレンマを強めたことは疑いない。91—92年の凶作による貿易収支の悪化に加えて，93年にはトルコ軍に対する防衛強化とサヴォイアにおける対フランス戦の費用調達，そしてガレー軍船の建造を同時に課せられ，ナポリの財政は，1595年の負債総額が258万ドゥカートにも達するほどの破滅的な情況を迎えた。後述するように，関税や間接税収入を担保に借入を行なう便宜が本格化するのもこの頃からである。

苦境に立った国王は，1594年，外国為替に精通しているとおもわれるアントニオ・ベルモストなる外国人とのあいだに，譲渡された税源の取戻しと負債返済のための基金として，スペイン本国からナポリに100万スクーディを送金する取決めを結んだ。送金を首尾よく果たしたベルモストは，しかし，負債の返済計画を最初の2年間進めただけで，残りの基金のうち50万スクーディを1年間ナポリから持ち出してもよいという約束を国王から取付けたのである。結局，この約束は実行されなかったが，国王とベルモストがこの企てで為替差益による短期的な利得を狙っていたことは明らかだ，とナポリの公文書は伝えている[30]。この逸話は，国王にとって外国業者と結託した為替差益獲得の魅力がいかに大きいものであったかを端的に示していて興味深い。

しかし，ナポリでは一方で公立銀行もそれぞれ着実な発展をとげつつあった。裏書，王国各地に代理人を配した銀行間の決済システムの整備，土地やその収益を担保にした貸付などを通して，公立銀行の信用状は国内経済の金融手段としてしだいに大きな信認を得ていくかのようにみえた[31]。また，国債としての役割についても，たとえば，公立銀行のひとつであるスピリート・サント銀行(Banco dello Spirito Santo)は1591年の総預金額の36パーセントを国債にあてている。それが銀行を圧迫するものでなかったことは，その後，預金に占める国債の比率をほぼ同じ程度にたもちながら，1620年まで総預金額を急速に伸ば

30) De Rosa, L., "Un'operazione d'alta finanza alla fine del'500," *Archivio Storico per la Provinciale Napolitane, ser. 3*, Ann. 37, 1957, pp. 267–273.

31) Lacombe, R., *op. cit.*, pp. 346–348.

していったことから推測できる[32]。

こうして，ジェノヴァ系の銀行が，1598年の穀物投機の失敗もたたって，1602年に最終的にナポリから撤退することになり，その顧客は公立銀行に吸収されていったのである。

しかし，貨幣不足が続くなかで，貴金属に代わる信用の保証を見出すことができないかぎり，銀行貨幣の発展はそれが抱え込んでいる不安定性をも拡大させることになるのである。三十年戦争の勃発がこの矛盾を露呈させた。そこに見られるのは，露骨ともいえるスペインの重金主義的政策以外の何ものでもなかった。

1621年，ナポリ副王は銀行の信用インフレをともなった貨幣危機の原因について，マドリードの宮廷に次のように上奏している。「貨幣変更と為替（外貨価値）の上昇の主たる原因は，まちがいなく銀行の活動にあります。かれらが，すべての決済を，したがってすべての良貨を手中に集めているのですから」。さらに，副王はその解決策として，銀行がすべての支払を正貨で行なうこと，預金を国債や徴税権の買取以外には投資できないようにすることを提案した。

これらの献策は実行に移される。まず，ジェノヴァから送られてくる予定になっていた300万ドゥカートの地銀（実際には100万ドゥカートのみ）を新貨に変え，翌年3月から預金支払をすべてこの新貨で行なうことが決定された。その際，旧通貨と銀行貨幣の名目価値の〈水増〉分を割引くという理由のもとに，新通貨との交換比率が実勢以上に引下げられ，各銀行は計算貨幣価値で平均70パーセントもの損害を受けたという。さらに，信用状の発行が禁止されるとともに，200ドゥカート以上の預金は利率6パーセントの国債購入へと強制的に転換されたために，銀行はその後，預金額の減少に歯止めをかけることができなくなってしまうのである[33]。

32) Lacombe, R., *ibid.*, pp. 350-351.
33) Lacombe, R., *ibid.*, pp. 355-360.

## III シチリア，ナポリにおける外国商人の変容

前節では，シチリア，ナポリにおける「預金銀行の展開過程」が，長期的にみれば，かならずしも公立銀行の信用能力の向上をみちびくものではなかったことをみた。帝国拡大の野心にとらわれたハプスブルク皇帝の一時しのぎの資金確保がその根本的な原因であった。それでは，国王がそのために大きく依存した外国商人の側の利害はどうであったか。それがたんに貿易や為替にからむものだけではなかったことに注意しなければならない。というのも，彼らはしだいに南都イタリアの〈封建的な〉流通，生産構造の内部にまで深く食い込んでいったからである。

まず，シチリアでのジェノヴァ商人の動きを追ってみよう。

1557年，フランスとの戦争を再開したスペインは，その戦費の圧迫のために同年，最初の債務不履行宣言を出すとともに，従来の asientos 債券をしだいに juros 債券に切換えていく方針をうちだした。この切換えは，asientos が短期債であったにもかかわらず，強力な借款団による貸付が多かったこと，またカスティーリャにおける歳入の担保を必要としたことなどから柔軟性に欠き，しだいに本国の財政不均衡をカバーできなくなったためで，その点，固定5パーセントの低利長期債である juros は，大量発行と返済の計画化がより容易であった。

juros 債が借入手段の主流を占めるようになるのは，二度目の国王破産が宣言された1575年以後のことである[34]。この頃になると，貸手の側においても，ジェノヴァ，ピアチェンツァ，ミラノ，ナポリを中心に大規模な国際金融市場が発展をとげ，譲渡性を認められていた juros 債は，為替や戻し為替(ricorsa)と組合わされて，投機の手段として盛んに取引されるようになったのである[35]。

34) Castillo, A, "Dette flottante e dette consolidée en Espagne de 1557 à 1660," *Annales, E. S. C.*, Vol. 18, 1963, pp. 751–753, 757–758.

35) Braudel, F., "La pacte de ricorsa au service du Roi d'Espagne et de ses prêteurs à la fin du XVI$^{e}$ siècle," in: *Studi in Onore di Almando Sapori, Vol. II*, 1957, pp. 1115–1125.

さて，シチリアでは，1550年代にトスカナ系の銀行がその信用を大きく失ったことについてはすでに述べた。この金融危機のさなかに最初の債務不履行に陥ったスペインは，破産宣言と前後するように，シチリアの税収を担保にした新たな短期借入の手段を確立することに成功する。そして，その貸手側の中心となったのが，ジェノヴァのマーチャント・バンカーだったのである。

1556年から59年にかけて，シチリア副王はおもにジェノヴァ人金融家から立続けに総額136万スクーディにものぼる融資（利率12-15パーセント）を受けることとなった。議会税がこの当時12.5万スクーディほどでしかなかった政府には，当初から償還の能力はあまり期待されていなかった。こうして，返済不履行の場合の規定が実施され，債権者はその元利分を間接税（gabelle）や穀物輸出税（tratte）によって支払われることとなったのである。債権者のなかには，利子を元本に繰込んだうえで貸付の更改を選ぶ者もいたが，60年代末から70年代になると，はじめからこれらの税収をあて込んで貸借関係を結ぶ方式が増えていった。言うまでもなく，その利点は見返りの実現が確実なことである。そうなると，貸付は短期間の徴税権の買取，請負という性格をもつようになる[36]。

ジェノヴァ人をはじめとする外国人は，さらに17世紀に入ると，徴税の長期的請負，政府が保有するその他収益権や官職，さらには地方のコムーネ（共同体，市町村）の買取にまで乗り出し，この島の権益に深く食込んでいった。

収入源の〈動産化〉は政府に関わるものだけではなかった。パレルモやメッシーナなどの大都市に居を構え，課税逃がれや議会での利権獲得に腐心する不在領主が，その地所の管理を請負人（gabelloti, appaltatori）の手に委ねる傾向は，その後，国家統一期にいたるまで南部イタリア農業のもっとも大きな特質となるのである。

さらに，封地は国王の認可があれば売却することもできた。こうした動きに危機感をいだいた議会は，1550年，チャールズV世に対して，貴族の世襲財産

36) Giuffrida, R., "La politica finanziaria spagnola in Sicilia da Filippo II a Filippo IV (1556-1665)," *Rivista Storica Italiana*, Vol. 88, 1976, pp. 314-326.

の分割相続や売買をくいとめる措置を取るように働きかけた[37]が，国王と同じく財政不安にある貴族が資産を流動化する傾向はその後も変わらなかった。

シチリアの税収（あるいは税源）を担保として借入れられた資金の多くは，もちろんそれを実際に必要としたヨーロッパ大陸へ直接送られたのだが，実際の正貨移動をともなわない為替方式もかなり利用された。たとえば，三十年戦争の勃発とともに急増したミラノやジェノヴァ宛の為替手形を調べてみると，シチリアで契約された融資額の少なからぬ部分が，実質的にはミラノやジェノヴァでスペイン側に支払われていたことがわかる[38]。

1630年から43年にかけて，この経路を通じて，政府を依頼人，金融家を送金人とする為替手形が約820万スクーディ振出されているが，北イタリアでの政府側への支払は690万スクーディに満たなかった[39]。この差額のすべてが為替差損や手数料の名目もしくは業者の不正によるものだとは考えられない。もともと政府出資の送金といっても，そのほとんどは租税担保の借入金からなっているのだし，しかもその実質的な融資はミラノやジェノヴァで行なわれる仕組みになっていたのだから，そもそもシチリアで820万スクーディもの現金が政府のもとに実際に集められたかどうかは疑わしいところである。したがって，この額は政府の可処分資金というよりも，むしろ償還すべき負担を表わしていたのかもしれない（全額を　借入に負ったと仮定すれば）。

いずれにしろ，実質的な現金貸付が北イタリアで行なわれた分だけ，そしてその返済にシチリアの各種収入源があてられた分だけ，シチリア南部の貨幣流通は少なくてすむわけである。為替と請負が連動したこのようなシステムは，少なくとも政府にとっては，国内の貨幣不足に対処するかなり有効な手段だったのである。

---

37) Aymard, M., "Une famille de l'aristocratie sicilienne aux XVI$^{e}$ et XVII$^{e}$ siècles: les ducs de Terranova," *Revue Historique*, Vol. 1, 1972, pp. 34-36.

38) Giuffrida, R., *op. cit.*, pp. 334-336.

39) Trasselli, C., "I genovesi e la Sicilia durante la Guerra Trent'anni I. Finanza genovese e pagamenti esteri (1629-1643)," *Riv. Stor. Ita.*, Vol. 84, 1972, pp. 979-981.

ところで，17世紀前半にシチリアと北イタリアにまたがって活動したジェノヴァ人貿易商は，その規模において，16世紀末の大商人の世代と大きく異なっていた。以下，かいつまんで指摘するにとどめるが，すでに1570年代から，貴族の海運投資収益は減少傾向をみせていた。シチリアへ進出する商人のなかで，権門勢家の比率が低下し始めるのもこの頃からである。新興商人の数のうえでの優位は17世紀に入ると決定的なものとなった。また，それと並行して，貴族の資本が本国からシチリア，ナポリ，カスティーリャへと流出していったことが確認されている。一方，ジェノヴァ船による貿易量をみると，それが1580年代から相対的に低下していったことは，ジェノヴァ港における取引額と税収額の推移や，同港およびメッシーナ港を訪れた商船の国籍情況などから明らかである。

これらの事実を綜合すれば，ジェノヴァ商人がハプスブルク帝国とシチリアにどのように関わってきたかを，次のように概括することができるだろう。1570年代に juros 債が市中に大量に出回るようになったとき，ジェノヴァのマーチャント・バンカーは一方でその投機的な運用に力を注ぐとともに，他方でシチリア経済内部の権益に深くからんでいった。この両極的な活動のなかで本国海運の活力は殺がれ，それは国内経済の停滞とともに，グレンディの言うジェノヴァの「四散」(diaspora) 現象[40]を引起こした（「四散」現象については，詳しくは，拙著『ステイティズム，ナショナリズム，ポピュリズム——世界システムと国民国家の位置』三嶺書房，1990年，近刊予定，第5章第4節を参照されたい)。

17世紀も20年代に入ると，しだいにスペインの金銀はロンドンやアムステルダムの東方会社や国際金融市場へと直接に向かい始める。「商業革命」の国である。そのとき，シチリアに拠点をもっていたジェノヴァ人はスペイン国王にとってますます重要な貸手となり，この島の土地，諸税などの収益権はいっそ

40) Grendi, E., "Traffico portuale, naviglio mercantile e consolati genovesi nel Cinquecento," *Riv. Stor. Ita.*, Vol. 80, 1968, p. 595.

う激しく〈動産化〉していったのである。ジェノヴァ貴族の資本を魅きつけたシチリアやナポリでは，他地域と異なり，商船の共同出資者（patroni）が居留地コミュニティーの領事（consoli）に選ばれることはあまりなく，その地に定住した有力な商人が選出されることのほうが多かったという[41]。

さて，ナポリの場合も，事態はシチリアとほぼ同じように展開したとおもわれる。政府が財政危機に陥った1590年代に，諸税収入をあてこんだ借入が行なわれていたことについては先に触れた。しかし，すでに70年代に，ジェノヴァ商人がマーチャント・バンカーを中心にこの方式の貸付をかなりの程度進めていたことがわかっている。彼らは，政府貸付の見返りとして，一般歳入や特定の税（穀物，生糸，羊，オリーブ油などの輸出関税，あるいはワインなどの消費税）の徴収を一定期間請負い，そこから9ないし10パーセントの割合で収益を得ていたのである。この税権譲渡（arrendamenti）のなかには，副王の全任期にわたるものや「生涯」（*ad vitam*）譲渡のものもあった。後者はそれ自体しばしば譲渡性を認められ，さらに第三者によって管理されることもあった[42]。

もちろん，徴税請負人（arrendatori, percettori）は外国商人に限られていたわけではなかった。17世紀初めには，バルトロメオ・ダキーノを領袖とするナポリ人の徴税グループ（superintendenti）が領主層と手を結び，ジェノヴァ勢力に対抗するようになった。その後，スペインの支配がパレルモ反乱（1647年，シチリア）やマザニエッロ一揆（同年，ナポリ）を契機に後退するにつれて，両地域におけるジェノヴァ人の権益は相対的に小さくなっていくのである。

しかし，ナポリ政府が収入の7パーセントにあずかることを条件に，税やその他収益権を完全に売却譲渡する方針に踏切ったのも，ちょうどこれら騒擾の直後なのである。こうして税権を買受けた連中は，管理組合を結成し，それをふたたび株式化して徴税請負人と契約を結ぶようになる[43]。（外国人支配が弱

41) Grendi, E., *ibid.*, p. 621, 628.
42) Colapietra, F., "La rendite dei genovesi nel Regno di Napoli in un documento del 1571," *Critica Storica*, Vol. 7, 1968, pp. 93-101.
43) De Rosa, L., "Property rights, institutional change and economic growth in Southern↗

まる17世紀後半以降は本稿の議論の範囲を越える。)

一方，封建領主の土地を請負う外国人のなかには，やがて自ら比較的規模の小さい地主になるものも多く，17世紀初めには，ナポリ，カラブリア地方の地所を所有する家族数のおよそ⅙は外国人であったという[44]。こうして，土地所有権の流動化と封土の売買が17世紀前半には顕著な動きとして現われてくるのである。

シチリアと同様に，ナポリでも国王への貸付は為替と国内の税収とが組合わされていた。ブローデルが取上げた1566年の例では，ジェノヴァで支払われるはずの asientos 債償還分40万から50万ドゥカート (ducati d'oro d'Italia) のうち，10万ドゥカートが為替によってナポリに回されてきている。この10万ドゥカートは議会税あるいは租税から譲与されることと取決められていたようだが，実際は，その支払のために，ナポリ副王が（おそらくふたたびジェノヴァで）21.6パーセントもの法外な利子で金を借入れなければならなかった[45]。

## IV　小括と問題提起
### ——南部イタリアの「再封建化」について——

封建的支配関係を越えた国家による税体系の完備が，近代国家成立のもっとも重要な条件のひとつであるとすれば，南部イタリアにおける政府収入源の譲渡は，この可能性を奪い去るもの以外の何ものでもなかった。18世紀末のブルボン朝による改革まで，シチリア，ナポリの税のことごとくが請負人の手に渡ってしまうのである。

しかし，こうした徴税権の譲渡をもって，南部イタリアが〈再封建化〉の過程をたどったと説明することに，ブローデルは慎重な留保をつける。「既存の

Italy in the XVIIIth and XIXth Centuries," *Journal of European Economic History*, Vol. 8, 1982, pp. 535-537.

44) Caracciolo, F., "Finanze e gravami cittadini in Calabria e nel Regno di Napoli al tempo di Filippo II," *Nuova Rivista Storica*, Vol. 66, 1986, p. 50.

45) Braudel, F., *La Mediteranée, op. cit.*, pp. 444-445.

国家が解体されなければ，封建制の形成や再封建化の歩みはありえない……」。「ところでナポリ王国の場合は，正確に言えば，国家が競売に出されたのではない」。「実は，マドリードの命令にもとづいて副王によって競売にかけられたのは，国家収入ではなく，国家の資本とでも呼ぶことのできるものなのである」[46]。

ここでブローデルが言う「国家の資本」とは，もちろん近代的な意味での「国家資本」ではなく，国家財源そのものが一種の譲渡される商品（株式）へと変質したことを指している。

一方，封地の請負の進展についても，たしかにそれを〈再封建化〉の過程と規定することはできる。シチリアでは，16世紀後半から顕著になった人口増と穀物生産の伸び悩みに促迫され，領主による荒蕪地の開発と新村の建設が進められた。そのとき，島外からの移民を含む開墾地生産者を確保するために領主の側から譲歩されたのが土地の永代小作化であった。ナポリでも，17世紀には，領主が経済外的強制にもとづいて余剰を収奪する権利は，永代小作農民の占有地に関するかぎり，薄れていった。こうした動きは，むしろ西欧型構造への再編とも呼ぶべきもので，そこから自作農への発展を展望することも不可能ではなかった。しかし，シチリアでは17世紀末になると，請負制度が発展するにしたがって，明らかに永代小作からラティフンディ経営への再転換がみられるのである。ナポリの場合は，封地の請負が永代小作の発展を阻害するものであったのか，あるいはそれと両立するものであったのかはいちがいには言えないが，財政に苦しむ不在地主が請負制を通して所有地農民への経済的支配を強めたことは間違いない。

しかし，このような大土地所有制のもとでの零細小作の収奪の再強化は，その一方で封地の売買，私有化をともなうものであった。永代小作にしろ，請負人による農場の経営にしろ，封建領主はいまや〈地主〉と呼ぶべきものへと変

46) Braudel, F., "L' Italia fuori d' Italia", in: *Storia d' Italia, Vol. 2*, Finaudi, 1974, pp. 2231–2232, cit.; Giuffrida, R., *op. cit.*, p. 329.

質しつつあったのである。

本稿の論旨は以下の通りである。すなわち，シチリア，ナポリでは，国内貨幣市場の混乱が公立銀行による信用手段の供給の必要を高めたにもかかわらず，まさに混乱の原因であった国王への資金供給が，為替や貿易をテコとする外国商人にますます依存していったために，国家信用による公立銀行の下支えが顧みられなかった，ということである。

しかし，封建制あるいは〈再封建化〉にもとづいた農業生産が産業の中心であるかぎり，そもそも国内に強固な信用組織が発展する必要ないし条件はなかったのではないか。——このようなありうべき批判に対しては，新たに次の問題を提起したい。問題は，封建制の存続から信用の未発達を説き起こすことではなく，ジェノヴァ商人の進出を含む請負制度の発達によって，国家「資本」や封土の流動化が16世紀末から本格的に展開されるようになりながらも，それが利潤の再投資，資本制的な雇用関係の確立，農業生産性の向上を導くことができなかったのはなぜかということ，さらにそれが国内産業そしてその要請に応えての信用組織の発展をどうしてもたらさなかったのか，ということである。